

氏 名	もり 森 直 人
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 293 号
学位授与の日付	平 成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻
学位論文題目	デイヴィッド・ヒュームの社会認識における複線的構造について

論文調査委員	(主 査) 教 授 田 中 秀 夫	教 授 八 木 紀 一 郎	助 教 授 竹 澤 祐 丈
--------	----------------------	---------------	---------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文はヒュームの社会認識が複線的構造をもつということを論証しようとするものである。その論証を、国内商業、国際関係、国内政治という3つの領域を対象とするヒュームの議論に複線的構造が見出せることを明らかにすることによって、遂行している。

この3領域に見られる複線的議論を扱うのがそれぞれ1, 2, 3章であり、それに序章での問題提起、終章での結論が付け加わっているというのが、論文の構成である。全体が、きわめて有機的に編成されており、首尾一貫した論証が展開されているという特徴を持つ。

序章で問題提起がなされる。フォーブズや坂本が代表するような、従来の通説的ヒューム研究においては、ヒュームは自由な経済活動、商業活動が富と正義を生み出し、自由と正義を保証する統治制度の発展とあいまって、勤労・正義・人間性の実現を可能にする文明化を推進し、しかもそれが国際的に普及することによって社会の文明化が国際的にも進展することを展望した文明社会の擁護者として登場した。著者によれば、しかしながら、ヒュームのテキストには、そのような安定した秩序形成原理に信頼をおく思考の系列とは対立する文明化への危惧や不安を示す言説も常に存在している。すなわちヒュームの文明社会認識にはアンビヴァレントな、複線的議論が見られるのであって、それは単に、その時々が発生する紛争、戦争などの事件への一時的な不安、危惧、葛藤ではなく、ヒュームの社会認識そのものの内在的な複線的構造として解釈すべきである。

そこで第一章では、「商業発展と公債累積」での複線的議論が析出される。ヒューム『政治論集』には二つの「自然史」があるというのである。著者によれば、ヒュームにおいて商業の発展は、奢侈を多様化し、奢侈への欲望を刺激するとともに、貨幣所有者を増大させる。名誉革命以後の国家は、商業社会を守るための勢力均衡の維持から戦費調達のために公債発行を行なったが、公債は貨幣所有者にとって代替的な確実な収入手段となる。勢力均衡政策は、頻繁な戦争によって公債の累積を不可避とする。こうして商業発展という自然史は、公債累積という自然史と繋がることになる。ではこの複線的構造をどうすべきか。ともに自然史なら国家は打つ手がないことになるが、著者は国家による公債破棄をヒュームの政策提言として解釈している。

第二章は、「国際正義と勢力均衡」を取り上げ、国際関係認識に二面性と総合性を見ている。著者はこう論じる。ヒュームは正義の源泉を共通の利害観に求めた。そして正義は交流と社会的結合が広がるにつれて拡張可能であると見ていた。その限り、ヒュームはヨーロッパにおいて安全で平和な国際関係（それを著者は国際正義の意味としている）の可能性を認める「調和的な認識」を持っていた。しかし、ヒュームには世界君主制に対抗するために要請される勢力均衡に由来する警戒的な認識があり、それは軍事と戦争を回避するものではなかった。とはいえ、著者はこの二つの側面は、それぞれ野放図に展開されているのではなく、相互に抑制する関係において結合されており、しかもそれはヒュームの社会認識を貫く特徴的な議論の構造でさえあると主張する。

第三章「正義の遵守と統治の安定」は、このようなヒュームの社会認識、政治経済論に見出された異質な複線的議論、二面性、両義的な思考は、道德論から政治経済論へと一貫する複線の構造の現れであり帰結であるという命題を論証する。非契約論的規約主義という特徴をもつヒュームの正義論は自然法思想の伝統の継承者としてのヒュームにとって重要であったことは否定できないが、しかし、極限においては正義を停止して統治を優先するというロジックを展開する彼の統治論との関係において整合的に理解するためには、正義と統治が二つの規約として理解されなければならない、と著者は論じる。

終章「ヒューム社会認識の特質」では、正義と統治の複線の構造という本稿の主要テーゼが要約されている。

論文審査の結果の要旨

ヒューム研究にはモスナーの『ヒューム伝』（1954年、第2版1980年）やフォーブズの『ヒュームの哲学的政治学』（1975年）など、画期的な研究がいくつもある。近年、研究はますます盛んとなり、毎年多くの研究業績が刊行されており、国際ヒューム学会での研究報告も充実の度が増してきた。学会の年報『ヒューム研究』は小冊子から始まり、今では立派な雑誌となっている。社会思想史（政治、経済、法、道德、歴史などを含む）分野のヒューム研究としてフォーブズ以外に、重要なものとしてロートワイン、ポーコック、ホーコンセン、ロバートスン、ホントなどの貢献があり、わが国にも重要な研究がある。そうした研究史を踏まえて遂行されたヒュームの原典研究の成果である本論文は首尾一貫した優れた作品である。

この論文は「ヒュームの社会認識」の「複線の構造」を解明する。著者はヒュームの主要なテキストに議論の複線の構造を見出す。ヒュームの扱うトピックは多様で多元的であり、哲学的テーマも時事的テーマもあるために、そこに統一性を見出すことはきわめて困難である。しかし、経験論的社会思想、自然法思想の経験化、自生的秩序の思想、哲学的政治学、懐疑的ウィッグ主義等の性格づけの試みがあったことも確かである。「勤労・知識・人間性」というヒュームのキー・ワードで説明する試みもあった。

本論文の最大の功績は、ヒュームの社会認識が複線の構造もつことを、国内商業、国際関係、国内政治という3領域における彼の議論を克明に解説することによって緻密に論証した点にある。細かく見れば三つのメリットを認めることができる。

第一に、ヒュームの商業論は、順調な文明の発展論ではないことを明確にした。すなわち、勤労に始まる農工分業から商業が発展し、自由な学芸や社交もまた生まれ、国際関係も文明化し、やがて平和な国際文明社会が生じるという楽観的な展望を中心に彼の商業論を解釈する通説は、公債論を軽視している。最近の歴史研究によれば、18世紀の大ブリテンは国内的安定どころか、国内的な党派抗争、対外的な戦争に明け暮れた「財政＝軍事国家」であり、そのような現実をヒュームが鋭く把握していたことを、彼の政治経済論に読み取るべきである。著者は国家による公債破棄をヒュームの政策提言として解釈している。

第二に、「国際正義と勢力均衡」の分析において、国際関係認識に二面性と総合性があることを明らかにした。ヒュームにおいて、商業の発展から調和的な国際関係認識が生まれているとすれば、世界君主制に対する警戒心から勢力均衡政策、戦争政策をやむなしとする峻厳で現実主義的な警戒的国際関係認識もまた生じている。両者が相互抑制的に限定されつつ関連づけられることで、望ましい可能性を追究する総合性が見られると言うのである。

第三に、正義と統治の関係に関して、統治は正義（共通の利益）の執行を起源とするとしても、統治の原理は安定を追求する側面を持つようになるから、両者が対立する場合もある。その場合、統治の論理が優越するというのがヒュームのロジックであることが明確に主張された。この関連で正義の可変性についての優れた緻密な分析が行なわれている。

しかしながら、この見事な論証構造にも問題はある。第一にヒュームの『政治論集』一つ取ってみてもそのすべての論説に分析が及んでいるわけではない。他の著作についても同じである。第二に、全体で論証されている複線の構造というのは、社会的現実と関連づけられているが、結局のところ、社会的現実そのものに二面性があるということなのか、それともヒュームの思考法の特徴なのかが必ずしも明確ではない。ヒュームの思考法に帰されているようにも思われるが、そうだとすればヒュームという人格の分析が必要であろう。第三に、著者が抉り出したヒュームの社会認識の特徴は、同時代人と比較してどのようにユニークなのかという比較対照がないために、モノローグに終わっている。本論は高度な論証構造をもつ、優れた論考であるが、それがゆえにこうした比較対照を阻んでいるという残念な結果となっている。

しかし、こうした点は、本論文の功績をそこなうものではない。本論文は優れた考察を展開したのものとして博士（経済

学)の学位に十分に値するものである。

なお平成19年2月20日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。